

348
205

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15



始



時231
289



春

緒

方



目次

昭和六年	(三十首)
昭和五年	(三十四首)
昭和四年	(二十六首)
昭和三年	(二十六首)
昭和二年	(十三首)
大正十五年	(三十四首)
大正十四年	(二十四首)

八三	六五	五七	四三	二九	一一	一
----	----	----	----	----	----	---

大正六年

大正十三年 (十七首)
大正十二年 (三十五首)
大正十一年 (十一首)
大正十年 (六首)
大正七年 (十五首)

卷末記

九五
一〇五
一二七
一三二
一三七
一三五

早春の山懐の日だまりに憩ひてひさし子
等よ歩まん

早春の曇る日ぐせの午後のくもり曇りし
ままに暮れはてにけり

庭隅の實生の桃はともしけき今年始めて
花つけにけり

春ながら降る雪しけしかささして行く土
手ぞひの風かけの道

茂、作雄等卒業

歌がたりかたり明しもせまほしき友みな
京へさりてゆく春

宮島

子にひかれ彌山みやまにのほる木下道三月なが
ら汗しとぎかく

尾ノ道の山の御寺の夜櫻にこもす灯は波
にうつれり

春雨の晴間を待ちて植糸かふるばらは真
赤の芽をつけて居り

遅刻

一人また一人おくれて教室に入りくる生
徒のおちつかぬ顔

入りつ日はそがひにひくし吾が影の長長
として野をはひて居り

櫻の葉ぬれて光れり二階より眺むる庭に
月明く照る

ぎんよりと梅雨空暗し降り出でんずる雨
を待ちつつ蛙高鳴く

とりのぐもり朝ふと出でし蚊一つさつとつ
かめば鳴る指の節

山中湖畔を三島へ行く途中

名物の「黒猫の玉子」看板を見てのみ過ぎつ
忘れかねつも

樹海なす青木ヶ原を見下ろして風に吹か
るる裾野の八月

わが脛の毛深きところ蟻一つ行きがてに
してのほりくる秋

亡き父が植ゑ給ひつる笹栗のつぶら實あ
また送り來し姉

柿の葉は大方落ちて赤き實の數ふるばか
り高く光れり

朝寒の霜おく屋根にしばらくを時時鳴き
て飛ばぬ小雀

正月をまたで咲きつぎ部屋ぬちに支那水
仙の香はほのけかり

昭和五年

淡紅椿は咲きそめにけり床柱杉の白木の
いやつやつやし

賣れ残る蕾すくなき梅買ひて更けたる夜
の街を歸り來

河原 六首

子等と掘る河原の砂の底しめりしめりつ
めたし春あさき頃

河原にてひるけするにて腰かけし石やや
ぬくき三月の晝

河原にて子等とたはむれ積む石の丸きを
一つ持て歸りたり

春の日に照らされながら砂にねて聞く舟
唄はねむたかりけり

河舟の水か夫この水み棹さゆ垂る水の光つめたし
柳の青み

野遊びに子等と探り來しつくづくしとほ
しけれどもなつかしみ食ふ

金魚 四首

終に死なす命ながらも幼児がよろこぶま
まに金魚を買ふ

金魚のつがひを入れし玻瓈がめの小さき
を軒ゆつるす初夏

朝みれば子に買ひやりし金魚は夜の間
死にて浮きて居にけり

幼児は死んだ金魚を地に埋めて小さな石
の墓を建ててた

耳を病む子の手をひきて夜の街にほたる
の籠を買ひて來にけり

五月雨のしとぎに降れば小さき巢に親蜂
二つつきてはなれず

枝ながら巢ながら風にゆられつつ蜂忙しく働きて居つ

幼 兒 三 首

幼くて祖母に聞きたるふるさとのうたを
真似つつ子をねかしつく

子に聞かす昔噺も大方は筋調はず忘れは
てけり

明日からはいい兒になると幼児は泣いて
ねむつておだやかな息

夏 休

試験終へて故郷へ急ぐ生徒等のかるき心
に吹く夏の風

ははそはの母を思へば夜を深み梟一つ鳴
き出でにけり

澁川海岸避暑

九首

沖遠く歐洲へ行く船が見ゆ今宵つくづく
倫敦を思ふ

發動機船ボートが通りし後を磯によする波やや
目立つなぎの朝かな

風路にあたる海面一筋にさざ波たちて白
く光れり

子等三人男女のけぢめなく黒黒やけて夏
さかりなり

砂やけし磯に背をほし見はるかす四國山^{やま}
脈^{なみ}みなうるみ居り

かすみては母住む伊豫の山山も今日見え
ずして夕さりにけり

向ひ路に稻光して遠雷はをりをりすれど
静かなる磯

讃岐路は夕立すらし雨脚の眞白く早く南
へ走る

暴風雨止みて暮るるなぎさに小蟹あまた
残るひかりをうけて遊べり

柿 三首

木熟柿を葉かけに見つけきほひ立ちわが
子は高き枝にのほるも

幼なくてのほり慣れたる柿の木をなつか
しみつつわれものほりつ

もぎたてのきねりを子等と分けて食ふ庭
一面に散り敷く木の葉

許されて賜饌に召されかしこくも父の帽
子をかぶりて行くも

兵士宿泊

兵士とめて語れば宵もあさき間に居ねむ
りこけて一人は寢にけり

昭和四年

大厄の年は來にけりひこせを祈る心に
虔つとましく居ん

伊豫路 三首

伊豫の山峰の白雪しらじらと夕陽にあか
く暮れ残り居り

石鏡の高嶺は見えね伊豫の山みな雪おき
て里も寒けし

山ひだの谷間谷間に雪残る二月寒けき汽
車の旅かな

皺のして折る千代紙ゆ幼児はめでたき鶴
を折り出でにけり

春菊を播きたる畠に末の女の童がたてし
手工の案山子

青だたみ敷きて寝る夜は借りて住む家
思はずいとほしきかな

虚無僧は柳の蔭にたたずみて下駄の齒換
をさせて居にけり

瀬掘りすゝ流とめたる水溜みだまりにものおぢし
つつ鮒は泳ぐも

陸上競技

• 若人の命尊しあかあかと照る太陽の
もに躍るししむら

五月雨の晴間晴間に鳴く蛙鳴く間遠のき
夕暮れにけり

曇り日の海に舟なし初夏の島山おろし吹
きつのもりつつ

若竹は親竹よりも高く伸び初夏風にそよ
ぎやますも

網干海岸

三首

播磨揖保郡黒崎村の名物の西瓜の味を子
等とたこふる

黒黒と黒崎松の大木の木蔭の蔭かげに風をた
のしむ

子等はみな遠淺海の岸遠く出でておよげ
りわれ岸に立つ

子病む

三首

病む吾子のためと氷を割る音は夜ふけて
高くひびくなりけり

みどりしてあかつきちかし氷割る湯殿に
秋の朝のつめたき

夜を寝ねであかつきに澄む汽車の笛遠く
聞きつつ火鉢によるも

ポスターの映畫役者の顔つけて立てし案
山子に吹く秋の風

盟休 六首

夜をこめて爭議生徒のたてこもる寮の灯あかし
はあかあか照れり

生徒みな今日も出で來ず書庫建つる擾亂
器のみ高鳴りて居つ

ともかくも教室に出てわれ待てぎ生徒來
ずして時移り行く

校門に生徒の歩哨たちて居りわが入り行
けば淋しく笑むも

ふけて焚くストーブの火のあたたかく校
長室のソファに寝るも (生徒の回答を待ちて徹夜す)

盟休のやみし夜なりひさびさに幼なき子
等と宵はやく寝る

昭和三年

小鳥 三首

部屋ぬちに飛び入りながらちちと鳴く小
鳥の胸はうちふるひ居り

窓しめて小鳥追ひつつ幼児は箒を持ちて
たちさわぐなり

掌にふるる柔毛にほけと肌のぬくみ命いとしと
放ちやりけり

父死す 六首

ちちのみの父みまかるゝ家さかり聞く春
の夜は雨もよひせり

ちちのみの父が逝く夜は春がすみ臙に月
をつつみはてけり

なきがらを棺に移すしまらくを聲あけて
泣くうからやからは

今宵しもしたしき人のなきがらをまもり
て更くる時を知らずも

通夜したるあまのまごろみ夢ながら見し
はうれしもすこやけき父

逝く春を死なせともなき人死にて心むな
しく夏を迎ふる

春雨は朝より降り暮近く鶏舎の鳥は空
を見て立つ

麻生機次朝鮮へ赴任

見送られて發車の笛の鳴るまでを麻生磯
次がおもはゆき顔

眞清水の垂る音かそけく鐘乳洞かなちちおくは寒
けしおそ春ながら

兒島の海 四首

曇り日の今日は兒島の海白し海へは入ら
で砂掘り遊ぶ

雨降れば部屋にこもりて昨日きのとりし子蟹
を子等と縁に走らす

島山に白雲みだれ沖つ邊は波高くたつ八
月ながせ

高高と竿につるせる干瓢のしらじらゆれ
て朝の風たつ

放課後の學校園の芝にねて見上ぐる空の
高き秋かな

日本原 四首

高原の秋の朝あけ深靄は晴れよぎみつつ
那岐の嶺見えす

幼なくて採りたる茸をひさびさに日本原
の松かけにさる

松林木の間に見ゆるトタン屋根の兵舎は
雨にぬれそほち居り

朝靄の晴れゆくままに柿紅葉ところどこ
ろに見ゆる松原

桂離宮 五首

導かれて歩く御苑の築山の細道に散る櫛
のつぶら實

つつましくあゆむ御苑のミび石に思はず
踏みてさくる櫳の實

清らけき竹のぬれ縁に御座設け月をめで
けん人し偲ばゆ

時雨する桂離宮のぬれ縁ゆ見下ろす池は
澄み透り居り

春さりて御苑の芝に陽炎のもゆらん頃は
のぎけからまし

昭和二年

新らしき年明けにけり燈明みあかしを上げてしみ
じみ神をおろがむ

新居 三首

冬ごもり今年は木の香新らしきわが家に
子等と祝餅食ふ

美はしき人の化粧のさまに似てかんなの
あとの木肌のにほひ

大工等は木片をたきてあたたまりおそき
ひるけを寒寒と食ふ

女人夫 二首

夜に入りて尙土運ぶ母親に泣く子の聲は
かれはてにけり

ざれ唄も歌はずなりて夕暗に女人夫は綱
たぐり居り

草^{いぢ}莓朝の食後にたうべつつ初夏風を子等
とたのしむ

はだかぜに握りて子等はかけ出しぬ秋の
祭の太鼓のひびき

鼻水が垂るよを子等に笑はれて朝の茶漬
を食ひ居りわれは

北風 三首

北^き風つよく一夜やまずて折折に物落つる
音をうつつななきく

大寒の風のつめたさ日は照れどなけうつ
ごこく雪花が散る

大寒の日曜の午後をこもらひて子の雪や
けに薬をぬるも

偶 感

ともすればあさましきこと思ひつる己が
心もとじたけにけり

大正十五年

ひさびさに五月雨止みて日がさせば縁に
上りてとぎつる鶏

讃岐路 四首

きほひ立つ四國山脈やまなみ日は落ちて汽車ゆ見
上ぐるいただきかすむ

汽車の窓に見上ぐる山の山腹に瀧遠光り
日はかたむきぬ

なみ伏してまだらにはけし山腹のころき
ころに洩れ日さし居り

霧かけてかくるを見るやはや晴れてそそ
りたつ嶺はいよよ高かり

高邊海岸海水浴 二十首

船に飼ふ鶏とりの鳴く音はさやけくて静にあ
くる高邊海岸

さくさくとぬれたる砂の踏み心地潮ひき
かけし磯づたひ道

月讀の光明るしひたひたに満ちくる海に
子に尿する

磯に来てあしたゆうべの砂遊び子等は日
向をいとはざりけり

子等三人焦けたる背の色くらべわけて黒
きがうらやまれ居つ

ひきおくれ磯のたまりに残る魚子等と
きほひ飯に歸らず

月夜よし帆下ろす音のかそけくて港の夜
は更け渡るなり

月空にかかりながらに明けて行く朝の磯
に吾一人立つ

今朝みれば岸邊に近く船とめて洗ひ物ほ
す水夫の妻あり

波荒れて行きがてにする舟一つ見えがく
れして夕まけにけり

よべの間の暴風雨静もりて朝あけの海す
がすがし蟹ここだ這ふ

宵暗を海月が光る岸近く人聲しつつ舟通
るらし

かはたれの薄らきらへる港にて帆を張る
音はかそけかりけり

旭子は今島山を離るなり漕ぎ出る舟の櫓
の光かも

流れよる水泡に交り折れ櫛の見えしは妻
に語らざりけり

思ひ出かあらじか夢か何時の日か何處か
に見たる心地する海

夕されば溶鑛^か鑪^まの火おこす製鍊所直島の
空は明るくほてる

かかり船水棹に干せる兒の衣の赤きが波
にうつる静けさ

ともづなにかかりて枯るる藻の花のゆれ
まさりつつ潮満ち來る

石炭を積みたる船の上にしてはだか男は
物煮るらしも

聖上御病

すめろぎは病ませてひさし下心淋しく今
日も新聞を讀む

いきいきと蓄ふくらむ菊買ひて乏しき錢
をみな拂ひけり

秋 三首

秋風のすすろに吹けば張り換し障子を入
れて夕餉したたむ

秋祭近づきにけり疊かへ蚊帳つらで寝る
肌心地かな

柿の實はぬれ光り居り枝高く時雨の後を
さす夕陽ひかけ

美那子

幸うすき子なりき故郷に汝を待てる祖父
母も見ずて死にけり

遺骨

病む子等を妻に任せて死にし子の遺骨抱
きて夜の汽車に乗る

汽車棚にのせてみまもる骨がめは震ひ止
ますて夜は更けにけり

席もなき夜汽車はかなし笛吹けど停まり
もせで幾驛か過ぐ

大正十四年

攝政宮殿下中國地方行啓

三首

春たけて葉櫻こなる頃ほひを天津日嗣の
皇子を迎ふる

春雨もやや小止みたりかしこくも若き皇
子は地に立たします

かしこしやわれらの皇子は五月雨にぬれ
つつ民をみそなはしけり

迷ひ犬 六首

うす寒き春の夕を迷ひ來し仔犬を飼ひて
いつくしみけり

迷ひ來ておきおきしたるまなざしに吾を
みつむる仔犬いたいたし

親もこめ夜を泣く犬のいとしくて床より
出でて乳をやりけり

けうとしと末の女の子かおづるがに仔犬
捨てんと抱きて野へ行く

川越えて捨てに来つれぎいのころはわれ
をしたひて側も去りやらず

小石投けて追へどひれ伏し逃げもせぬ仔
犬いとしく又抱きて見つ

兎を飼ふ 四首

ひとむきにねだる幼児なだめかね白き兎
のつがい飼ひけり

幼兒は子兎のさまうちまもり
うちまもり
つつ草の葉をやる

子兎のつがひは愛し子等に慣れて春の日
向にやすやすと寝る

子兎の耳ももちてさけつれど音にだに
鳴かず手足のべつつ

弟 二首

亡き母がわけていとしと愛でし子の弟は
若く死にはてにけり

うれしきは死相よろしく弟はやすやすと
して命絶えけり

妻入院す

母居ねばいさかひもせず黙しつゝ飯を食
ひ居る幼児三人

病院へ三人の子等を連れて行く町並なが
くあつきひるすぎ

妻退院す

秋空は曇りて寒し病院ゆ未治退院の妻の
手をこる

末の兒は母と寝るとして喜べりその病む母
は一人寝にけり

母病めば枕邊近く子等三人淋しく春の双
六をする

病む母を交えて遊ぶ双六の母の骰子はも
末の子がふる

まがなしき數數持ちて來し年ものこり少
なに暮近づきぬ

大正十三年

旅 三首

遠く來てはるけき人を思ふ間も耳につく
なる谷川の水

思ひ出づる淋しみあれば旅の宿に籠りて
今日も日を暮しつ

霧深くあかきおそき山峽の旅宿にめさ
めて聞く水の音

太田氏

病む父をめぐりて妻と子と母と生くるを
聞くはひとごとならず

伊豫の海今日は晴れつつ向つ島かつかつ
見えて夜は明けにけり

春雨にぬれてうつむく草の花花も寝るか
と幼な兒は云ふ

山一つ越ゆれば朝の霧はれて谷間谷間の
杉木立見ゆ

五月雨は降りしきりつつ我部屋の屋もりの
水は鉢にたまれり

天井に屋もりの音の絶えざれば心なごま
ず本よみてあれど

試験監督

ほのほのこねむたくなりぬ教室のストウ
ブのそばに立ち盡しつつ

明日教ふることを調べてふけにけり夜ぞ
らつめたく図書館を出づ

部屋ぬちにつと入り來り忙しく又とび去
りぬ小さきあきつは

暮れゆけば廣野を越して金山かなのいただき
近く灯はつきにけり

親しめばやめがてにして今宵またつりて
寝ねたる古き蚊帳かな

蚊帳つらでひろびろ寝たる初秋のすがすがしさに朝寝してけり

はろばろと送り呉れたる北海の太き蟹食
ひ興吉を思ふ

朝寒み背戸の土塀になめくぢの這ひたる
あまの一筋白き

大正十二年

潮騒を聞きつつぬれば旅の宿に心なごま
す明日も旅せん

病む子 五首

病みて伏す吾子の眠りの長ければいくた
びか来て脈とりてみつ

長長と病みて籠れるいとし兒を慰めん
ておぎけても見つ

幼兒のあさき眠はさまさじと雨のしぶき
に障子そとひく

吾子病みてひさしくなればみどりする心
づかれにひるも夢見る

病みほそる子を慰むとおもちや屋のまづ
しき店にいくたびか立つ

いまはとて醫者は云ふなり常ならば奇蹟
を思ふわれならねども

いとけなく死にたる吾子の棺の中にしほ
りし乳を入れて泣く妻

降る雨に倒れながらも豌豆の蔓はかほそ
き葉を巻き居り

白壁に昨日のままにとまり居る蜂一つあ
り五月雨止まぬ

くりやべの壁にこまりて昨日のまま動かぬ蜂は死にてあるらし

残るこの一葉をはまばこの毛蟲いづち行くらんだそがれにして

五月野の淺茅そよがずしんしん日かてるなかに雨蛙鳴く

塀ぎはの名知らぬ草の白き花さす日の光にはりつめて咲く

戸外戀ひてガラスの面をうちてやまぬて
ふてふあはれ夕ぐるる部屋

水盤に金魚の目玉くつきりと黒くすみつ
つ夜は更けにけり

幼児の赤くつめたき手をこりて日あたる
縁を歩ませにけり

藤島孝平氏 四首

病みてはやひとせをへぬひとせを歌
にささけて生き來し命

人づてに消息たよりはきけき手紙書く親しさも
見せて幾月か経し

病む友の歌に泣かれてくり返しくり返し
讀む友のよき歌

相見たる春はかへりぬこの日頃又見んこ
このいよよまたれつ

所感

しみじみ己が心を見つめつつ静かに生
くるこの日頃かな

大正十一年

秋 五首

秋立てば蜘蛛は破れし網すらもそのまま
にして高くかかれり

柿赤くうれたる空に何處よりかうすら煙
のなびく夕暮

秋の夜の星みなすめりはれやかなの心をも
ちて家路へ急ぐ

樹に倚れば風に吹かれて樹も動き心なご
まず見上ぐる秋空

葉鶏頭のほすえの蟲はおここひも昨日も
けふも動かざりけり

やや動くくせのつきたる齒のありて落ち
つかぬ日を今日も暮しつ

吾を見て聲あけて笑むいとし子のそのい
としさにかき抱き上ぐ

我を巻く二十重のくさりさと落ちしここ
ろよさありふと友に遇ふ

冬の日の今日あたたかみ端居してふと見
付けたる蟻は愛^{かな}しも

読み終へて最後のページ閉づる時心にな
がくヒロインの顔

大正十年

けずりたての鉛筆のしんで突き刺して殺
した蟲の魂の行方

沙翁生誕地にて

去りがてにひゞ汽車のべて川岸の若草に
寝て見る水の色

伊太利にて

ダヴィチの聖母に似たるひゞも見し中部
伊太利の三月の旅

印度洋にて

ふと見れば見覺のあるかもめ一つ今日も
亦わが船を追ひ来る

寮生活を思ひ起して

三首

高らかに廊下の床を踏み鳴らし踏み鳴ら
しつつストームは行く

ストームのどよみ遠のきうとうと眠る
とすれば鷄鳴きにけり

ストームの冷えし寒夜を床ぬちに長き手
紙を母に書くかな

大
正
七
年

久男死す享年満六ヶ月

十五首

はやすでに生くるしるしのなしと云ふ醫
者の言葉のうらめしきかな

死にし子の口のあたりに耳あてて息やは
あると又ためし見つ

泣きやまぬ妻を叱りてにもに泣く得堪へ
ぬ思今いかにせん

今を限りこ小さき棺に釘打てば音も身に
しみただ涙落つ

焼がまに棺ひつぎを入れて締むる戸の金属かねの音
はも耳ゆ消えざり

うすみぞれ降る日ながらに骨拾ふかめを
抱きて焼場へ急ぐ

大きなるが五寸に足らね子の遺骨の小さ
きも惜しくみな拾ひけり

讀經も弔辭も空し死にし子のよみがへら
ねば何慰まん

慰めを云ふ人憎し心から悲しむ人は共に
泣くべし

生きてゐては乳のみ飲みし子なれどもめ
づらしきものみな供ふべし

四十九日ははやたちしかとうらめしし子
に遠ざかる心地こそすれ

骨がめの目張りするこて持て來たる飯の
白さもわびしかりけり

目張りして白き小箱をかいだけば可愛ゆ
き笑顔目に浮び來も

夏生れ花をも待たで死にし子のあはれな
らずや春も知らなく

めさむればしとしと夜の雨降り先づ思
ひやる小さき墓かな

卷末記

〔「早春」を送る手紙に代へて〕

斯様に集めてさて讀み返して見ると、矢張り私の拙劣な歌なんか集めて印刷しなければよかつたと思はぬこともあります。併し本にして出版したのも決して得意になつて見て貰ふとか或は後代に残さうとか云ふ大それた考などは毛頭なくて、只和歌を楽しむ知友に送つて一覽を願ひ、まあ久瀧を敘する料にしようと思つた位のごく軽い意味からです。本當にさうです。

本書に入れた歌は御覽の通り大正七年から昭和六年までの二百五十首ばかりです。それ以前のは全部捨てました。現在の心境と餘り離れて自分にびたりと來ないからです。歌の配列を逆年順としたのも現在の氣持に近いものを前にするためです。

もともと私は少年時代から現在まで作歌の上での先生と云ふものがありません。従つて所謂全くの我流いや無茶苦茶流に過ぎません。従つて大し

て強い主張もありません。私が古今集や新古今集又は伊勢物語の中の歌を
読んで感興を覺えたのは中學の三四年生の頃でした。(これは父の本箱か
ら和歌に關する書物を探すとこんな種類の本が先づ目についたからです。
と云ふのは漢學者だつた父の藏書は殆んど漢籍ばかりで、國語國文學に關
するものは極めて部數が少なかつたからです。)

勿論よくは理解出来なかつたのですが、古今集遠鏡とか伊勢物語講義と
かを讀んでほんやり歌の意味が分つて來ると、偕自分でも作つて見度い氣
になつたのです。併し其の作つて見度いと云ふ氣持が起きた理由も、内心
の歌心が湧き上つて自ら躍動し、自然に作歌の動機をなしたと云つた風の
藝術的に高尚なりとされるものではなくて、當時父は自ら盛に漢詩を作つ
て居り、又地方の誰彼を弟子として平仄を教へたり、頻りに漢詩の添作を
したりして居たのを毎日見てゐたからでせう。尤も其の頃私も漢詩を習へ
ば習へたのですが、父はどうで漢詩なんでもは今後次第に作者も少なく
なり、これを鑑賞する人も減じるばかりなので、若い者が始める必要はな

いと云つて、他の人々にはよく詩の講義や添削をしてやつたりしてゐたく
せに、私には勸めどころか止めたのです。或は見込がないと父の方で見切
をつけたのかも知れません。兎に角身邊の人々が漢詩を作つてゐるのを見聞
して、自分は和歌を作つて見ようとほんやりながら考へたのでせう。時々
和歌に似た變なものを作つてノートに書きつけたり、時には又雜誌な
どに投書した經驗を持つてゐます。

高等學校に入學してから始めて短歌會と云ふものに列席して、先輩や同
輩の歌を見たり又歌話を聞きました。其頃田波御白氏は二年上で石井直三
郎氏は一年下でした。これらの人々は勿論その他多數の諸君に指導されて
漸く歌に對する眼を開いて貰ひました。一方現代歌に幾分興味を持つて來
て「創作」「スバル」其他の短歌雜誌を始め牧水、晶子、寛、柴舟氏等の歌
にも觸れ、これらの人々の作品からも影響を受けた事は多大であると思ふ
が實に亂讀で特にこれと云ふ好きな歌人もなく、従つて殊に此の人の感化
を最も多く受けたなんて云ふことは自分には判然しません。實は此の頃志

田義秀先生の御好意で柴舟氏に二三度歌を見て戴いたことはあるが、これは個人としてではなくて六高短歌會の一會員としてでした。

こんな風で一時私に作歌熱らしいものが出かけたが、大學に進入してからは又熱はさめてしまひました。一方作歌の友達はなくなるし又一方何かと多忙で歌書を読むことにも幾分遠ざかつたためです。

これが習慣となつて大學を出てからの數年も餘り歌には親しみませんでした。

私が教師として六高に赴任したのは大正六年でしたが、それから暫くすると學生のやつてる短歌會に引つ張り出されて、出席するやうになりました。教授でよく出たのは酒井賢君があり、白石早出雄君があり、死んだ藤島孝平君があり、後には森敬三君があります。學生の方では何しろ十餘年の間のことですから時によつて多少の差はありますが、多い時には十餘人少ない時でも五六人で、總計は可なり多數になつて居ります。其の各人がそれぞれ變つた特徴と素質と境地とを持つて居て、短歌會の席上で御互に

熱心に批評し合つたり慎重に歌論を闘はすので、其間に私が得るところの多かつたのは云ふまでもないことです。實に教へられるところの多かつたのを感じせずにはゐられません。餘り歌に熱の無い私に歌集を出させるまでに刺戟を與へて呉れたのは、實に六高の短歌會に外ならぬ事を明言致しこれを機會に感謝の意を表して置きます。

何しろ多少ながらも私が和歌に關心を持つて來てから歌壇の形勢は幾度か變化しました。幾度か新主張が生れて内容思想の上からでも、或は形式の上からでも、歌壇の變轉は實に盡きるところを知らぬ感があります。現在に於ても定型非定型の兩論を始めとして、色々の城廓に據り様々の旗指物を押し立て、群雄割據の形勢です。

此の事實は短歌雜誌の數の多いことを見ても分る事です。所が私などは有り難いことにはほんの一介の素浪人で、何等束縛を受けずに行動し得る自由を與へられて今日に至りました。勿論槍の一手も知らぬ私を召抱へに來る大名の無いのと、野に在つて仕官を望まぬ野武士根性のあるため

せう。併し考へて見ると之も愉快なことです。今後も此の主義主張の無いのを主義として押し通し、歌の出来る時は作りもしようし、出来ない時は人の歌でも読み、いやになつたら又其の時のことゝ壺中の天地を楽しんで悠々自適に生きて行きたいことを念願にしています。

倅重ねて申します。こんな變な歌集を作つたことを笑つて下さい。そして歌のよしあし、本の出来不出来は問題にせず、まだあの男も歌など作つて生きてるか位に思つて戴けばそれでも私は満足です。矢張り之が道樂と云ふものと始めて分つた氣がします。こんな本がと思つたら反古籠に御捨て下さい。それで私の單に御無沙汰見舞のしるしに、此の本を御手元に差し出す目的には十分かなつてゐます。

尙吉田苞君が明治神宮の壁畫作製に多忙を極めて居られる最中、表紙畫を描いて下さつたことを厚く御禮を申上ります。左様なら。

昭和八年二月十一日

緒 方 健 三 郎

昭和八年三月十三日印刷
昭和八年三月二十日發行
(非賣品)

岡山市門田屋敷一六四
著作兼發行人 緒方健三郎

岡山市東中山下二二三
印刷人 村本萬龜男

岡山市東中山下二二三
印刷所 研精堂印刷所

終

